

4. 分科会

分科会 1 「東日本大震災における岩手県でのボランティア活動、

及び東北3県以外の被災地でのボランティア活動」

ファシリテーター 山崎 水紀夫 氏（NPO法人高知市民会議理事）

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

この分科会は、東日本大震災にかかわる部分で岩手県と千葉県等（宮城・福島以外）で活動をされた方の意見をいただきます。最初に皆さんからお話をいただいた後、課題を出し、今後それに向けてどういう展望を描いていくかという形で進めていきたいと思っています。名簿順で、植山さんからお願いします。

○これまでの取組を通じて明らかになった課題（今後の課題も含む）について

植山

この3月で、NPO法人になりました。今、神奈川県、県社会福祉協議会と協定を結びまして、「かながわ東日本大震災ボランティアステーション」という常設の事務局をつくりまして活動しています。もともと神奈川県社会福祉協議会が釜石中心にやっていたし、岩手県の遠野市に県が「かながわ金太郎ハウス」という宿泊所をつくってくれましたので、そこを拠点にしていこうということで、去年の7月24日以降、ボランティアバスを毎週運行しています。場所としては釜石、大槌、陸前高田です。最初に入ったのは神奈川県ともゆかりのある大船渡です。その後まごころネットと一緒に活動していますので、まごころネットの動きと大体沿った形になると思います。独自の活動としては、陸前高田で復興されたお店などがぼちぼち開設していく中、そのマップづくりに協力して大きな反響を生んだかなと思っています。これからは大槌と陸前高田が軸になってくると思いますが、陸前高田は農業の復興なども含めて、それから、大槌はかなり大きな被害があったので、そういったところにもできるだけ長期的に協力していきたいと思っています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

特にここで共有しておきたい課題や検証してもらいたいことはないですか。

植山

キャンセル待ちが出るぐらいボランティアバスを出せる状態なのですが、今、4月以降の高速代に悩んでいるところです。ボランティアバスに対する高速道路料の優遇措置を願っているところです。ボランティアバスの運営にかかわってくれる人が50人近くいて、何とかその運行をやりくりしているところなので、できるだけリーズナブルに岩手・宮城に行けるような方向が続けばと思っています。それが今の課題です。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

質疑は、また後でまとめて受けたいと思います。それでは、岡野谷さん。

岡野谷

東日本大震災以外の災害についてはかかわっていませんので、「特になし」と書いています。取りあえず聞かせてもらいたくて来ました。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

では、「今後の展望」のところたくさん書いていただいていますので、またそちらの方でご意見をいただけたらと思います。では、藤田さん。

藤田

自分たちの団体や生協さん、災害救援ボランティア推進委員会千葉県ネットワークなどが入っている千葉県災害ボランティアセンター連絡会で、まず各市町村の調査に行き、旭市でボランティアセンターの立ち上げから閉所まで継続的に支援しました。旭市社協は、社協の建物が避難所になったために、行政から避難所の運営を丸投げされて、とてもボランティアセンターの運営までは手も頭も回らないという状況でした。おとしの11月に、千葉県内の県社協と市町村社協で災害時の支援協定が締結されていて、県内社協の職員の取りあえずの応援体制ができたということで8カ所ボランティアセンターができたのですが、そういう形でうまくできました。

旭市のボランティアセンター閉所後は、いわきの方に入っていたのですが、今回のように大きな地震の場合、余震がいつあるか分からないし、自分たちも今度またいつ被災するか分からないという中で、県外への支援をどこまでやっていけるのか。もしかしたらすぐ戻らなくてはいけないかもしれないし、県外で燃え尽きるわけにもいかないということでジレンマがありました。自分たちもセカンドシーズンがいつ来るか分からない状況の中で、ひととおり落ち着いてから県外というところで、最初、出足が難しかったというのが課題です。

水島

17 ページですが、今、千葉の方についてはあまり注目されないのですが、県ボラセンターと県内ボランティアの仲間の皆さんたちがしっかり支えてくれました。実は、3月31日まで集中的に入って、3月31日で旭のボランティアセンターをもう閉めてしまったのですが、翌日の4月1日に千葉市がボランティアセンターを立ち上げたのです。よく意味が分からないのですが、住民が気付き始めて、結構社協の中でも話題になって、今、それが少しずつ表面化してきているということだったようです。聞いてみると、職員中心でやれという市長の命令だったようです。ただ、液状化が非常にひどかったというところです。

生協では、何か起きたら行政の依頼に基づいて緊急支援物資を運ぶという協定を46都道府県と結んでいましたし、市町村とも地元の生協が結んでいたということで、要請があればいくらかでも送っていくという形を取ったのですが、今回の反省としては要請が来なかったのです。県庁に出向いたら、門前払いという表現も

一部ありましたが、訳が分からなくてそれどころではないという状況だったのかなというとらえ方をしています。協定を発令してくれれば、いくらでも物資を持っていきますという状況で東京を中心に構えていたのですが、発令がなかったことが非常に残念です。何日も出向いて、県の職員、宮古市の職員をずっと説得して回ったのですが要請が出てきませんでした。この差はすごい差になったのかなと思います。その分、宮城県と福島から要請がどっと来たものですから、約 20 日間で 10 t トラック 990 台が主に岩手以外のところへ流れていきました。そういう状況で、物資支援が非常に遅れたということが大きな課題かなと思います。それどころではないという実情も見てきましたが、そういう中で受援の体制と、あとは日常の関係です。協定を結んでいるのだけれども担当者がどんどん替わって、全然そのこともひも解けない。そういうところにどーんと大きな災害があったというのが実情かなと思っています。岩手の方に最後に私が行ったのは 8 月です。仮設住宅への引っ越しを生協が小さいトラックでやっけていまして、それが 300 件ほどあったのが、一応大方の全国からの応援はそれでやめたということです。

呼びかけて出してもらった材料を使って、「まけないぞう」とか、折り紙とか、ミサンガを被災者を作ってもらって、今度はまた逆に呼びかけてそういったものを買ってもらう。そうすると 1 個につき 100 円がおばあちゃんに入るというところに乗って、今、大きく広げようということをやっています。地元を生協があって、生協も逃げられないのです。ですから、最後の一人までとにかく支えていこうということで取り組んでいます。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

私は岩手県大槌町に、震災 1 週間後の 3 月 17 日から 10 日間程度と、5 月、7 月と 3 回支援に入りました。室崎先生が言われたように、受援力がなくなっている場合、例えば地元が壊滅して、社協の建物も何もないような状態で機能まひに陥ってる場合に、外部の人間がボラセンをつくるのもありかなというのは今回感じました。高知県でも、職員が一人しかいない社協もあるので、地元主体という原則はあるにしても、場合によっては当初は外部がつくり、後で引き継いでいくというやり方も考えられるのかと思いました。

あとは 19 ページにも書いているところなのですが、みなし仮設での支援方法です。行政も実態が把握できず、支援がなかなか行き届かないというところと、個人情報保護法というのは、こういう支援のときとか、日常の要援護者の支援をするときでも、天下の悪法と感じるほど、必要な情報が全く入ってこないし、行政からももらえない。この問題が出てくるのではないかと思います。

山本

みえ災害ボランティア支援センターで県と県社協と一緒に活動しています。報告書を配ってますので、また見てください。

今回感じているのは、災害ボランティアセンターの役割が矮小化しているというか、頭数のコーディネートだけになってきているということです。もっと言うと、被災者のニーズをどうとらえているか。今、いろいろなボラセンで、できることだけマッチングし、できないニーズは、「それはうちの役割ではない」と、放置なのです。それは被災者のニーズありなしでは無く、センタースタッフがコーディネートできるかできないかで判断していて、本末転倒です。これは特定の団体を指定する意味ではなくて、私たち自身もそういう

ところに陥っていると思っています。

あと、被災地の中で同じ地域で活動している団体間の連携は非常に難しいです。まずどこが何をしているのかもよく分からないし、行政からわれわれがそう見えているのと同じように、支援団体同士もよその団体が見えない。ともすると、そこをどう排除するかみたいな議論が出てきている。これはもしかしたら特に岩手の県民性もあるのかなと思いますが、よそ者は基本排除という方向性は今回感じました。

3番目には、今回も多くの方が現地に物資を送ってくれるのですが、現地ではミスマッチであったり、要らないものであったり、送る側の論理がまかり通っているというか、支援したいから受け取ってくださいという物資の届き方です。「子どもたちが頑張って折ったので、この折鶴を何とか受け取って」とか、暖かい時期になって、「うちの名物だから」と温かいどんを持っていくとか、「現地の人の声を聞こうよ」というところがたくさんあったので、その辺はノウハウをもう少し共有化できないかと大きく感じました。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

一般参加の方も、ご所属と名前と、支援に入ったところがあれば一言ずつぐらいいただけたらと思います。

読売新聞

私は読売新聞の者で、今日は取材に伺っています。

小和田

私は会社員ですが、内閣官房震災ボランティア連携室が立ち上がりましたときに、「助けあいジャパン」という情報支援サイトが立ち上がりまして、そちらの運営をしています。今、復興庁の公益的民間連携班と連携してまして、東日本大震災でのボランティアとか、企業間連携というところでの課題を含めて、今後の防災と復興に何らか生かしたいと思って参りました。

釣田

JCNさんが現地会議という形で各地で連携を持つ場を開催されているのですが、そちらに伺って実際に現地の声を聞くということをしています。

頼政

日本財団ROADプロジェクトという日本財団と一緒にやっている活動で、東北3県に足湯ボランティアを送り出しているのですが、主に私の担当が岩手県ということでこちらに参加しています。

小野寺

先ほど話題提供しましたが、僕のところは一関という岩手県の一番下の町です。一番被害の大きい陸前高

田が隣町なので、一関として隣町の陸前高田を支援するということでずっと入っています。発災後は自分たちも動ける状態ではなかったので、まずライフラインの確保ができて燃料確保ができてから、陸前高田には1週間ぐらいしてから入りました。その状況を見るやいなや、いろいろとやらなければいけないことがたくさんあるなと思いましたが、僕たちはレスキューできないので、避難所を回ってご用聞きをしながら情報を集めて発信するということから始めていきました。

今、課題という部分で出されていますが、やはり物資支援のミスマッチはかなりありました。たくさん送っていただいたのですが、生ものが入っていたり、服の中にその地方の名物の煮物が入っていたり、「これ、着たいですか」という状態の服があったり、頂いたはいいけれども仕分けをする方が大変で、使えるものと使えないものを仕分けると9：1の比率になるという状態がありました。

ボラセンの役割としては、マッチングをしないとかというのは確かにあると思いますが、陸前高田のボラセンは今、縮小もしてないですし、逆に、津波に遭っていない地域でも過疎高齢化が激しいところは同じ状況でしょうということでその部分の対応をしています。

あとは支援者団体の連携です。テリトリー争いがすごく激しいです。岩手県民もそうなのですが、ほかの団体もテリトリーを決めてしまっています。その部分で一緒に連携しましょうという話をしているのですが、「いやいや、うちがやっているから入らないでくれ」というのがあります。今、陸前高田では、JPFさんとJANICさんと一緒になってネットワーク連絡会を立ち上げています。陸前高田にはいまだに80団体ぐらい残ってしまっていて、その団体が連携を図って支援格差をなくしていきましようということなんです。昨日、年度内の最後の会議をしまして、次年度に向けてお互い手を取り合ってやっていきたいと思いますという方向にはなっているんで、そのあたりは進んできているのかなと感じています。

課題は、支援団体が漁業の知識がないということです。そのために、漁業支援をしようと思ってもできないという状態です。あとは、例えば三陸の船と関西で使う船は全く違うなど、漁業支援といっても全国一律の考えでは通用しません。支援団体はそういう専門的な知識を身に付けなければいけないのと、支援団体が今どんな支援をしようか模索する段階になっていると感じています。

鳥山

千葉県社協でボランティア担当しています。千葉県でも災害ボランティアセンターを3月16日から4月28日まで立ち上げていましたが、災害ボランティアセンター連絡会の14団体のメンバーであり、本日お見えの千葉県生活協同組合連合会の水島さんや千葉レスキューサポートバイクの藤田さん達との、顔の見える関係づくりがあったからうまくいったというところがあります。今日は、次に何ができるのかを模索するため参加させていただきました。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

大体ひととおりのご意見をいただいたようですので、今までの意見を含めて、ここも課題ではないかと思われるところがあれば先生の方からお願いします。

小村

私も正直勉強しているところです。私はこの災害を海外で知って、それから帰国するまで半年ありましたので浦島太郎状態でした。半年の間、何をすればいいのかを考えつつ、なかなか現場に行けませんでした。引いた目と言え言葉はいいのですが、ひょっとしたらとんちんかん話をしてしまうのではないかと恐れつつ今に至っています。

私と岩手との付き合いは、防災教育でもありますし、防災研究でもあります。やはり一番深いのは田老町、宮古市ではあるのですが、そこで男女共同参画に携わっている「あじさいの会」の活動をお手伝いしたことがあります。そこでは「飯の種って何なの」という話を震災前にして、それで、支援の在り方は一体何なのだろうか。「われわれは販路拡大で何かお手伝いができるのだろうか」というテーマで地震の3年ぐらい前に災害対策のワークショップをしたことがいまだにずっと引っ掛かっていまして、ボランティアは一体何ができるのかというテーマで考えてみたいというところが一つ大きな問題意識にあります。山崎先生が午前中のまとめのときに、職の議論と住まいの議論とつながりの議論と総括されました。私も全く同感なのですが、一番喫緊だと思われる職の議論についてボランティアでできる話なのかということも含めて、でも何らかの手は導き出したいと思いつつ、まだ模索の最中です。本職は防災をやっている大学教員ですので、もっと明確な答えが出せなければならぬはずですが、ごめんなさい。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

とんでもないです。山崎先生、何か補足があれば。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター所長）

私が岩手とつながっているのは、最初は陸前高田にボランティアバスを出していました。もともと陸前高田は12の住区に分かれていて、地区それぞれにコミセンがあって、つくり方が他の地域と違います。そこにピストンみたいに人を送っていきました。形も流れも非常に特徴があって、面白いなと思っています。ただ、そこにかかわっている民生員さんや自治会長さんのお話を伺っていると、役所が流れてしまって、首長さんを含めて多くの人が亡くなっている中で、ぼうぜん自失の状態から立ち上がっていくのですが、職員の燃え尽き方が半端ではないと思って見えています。それぞれの自治体で、つくり方とか、人間関係とか、首長さんの考え方とかはいろいろ違いがあるので、地域のことにきちんと学ばせていただきながらということが必要ではないかと、岩手の場合は思っています。

というのは、今、岩手県各市町村に配置されている生活支援相談員さんが仮設・みなし・一般の支援が必要な方々をずっと回って、ほとんど全戸訪問が終わっているはずですが、その方たちから上がってくる問題を聞くと、半端でない事態なのです。がれきがボランティアの最初の入り口でしたが、これからは生活にどうよりそっていくのか、その地域にどうよりそっていくのか、よりそいの伴走をどう進めていくのかということが問われていると思います。地元の方々が主人公ですから、そこによりそいながら何ができるのかと思いつつみんな模索していると思うのですが、岩手が持っている文化、生活の様式、暮らし方とか、今までのいろいろな人のつながりが切れているところもあります。例えば今まで海側で船のことをやっていた方々の母ちゃんたちのつながりはあったのですが、その形も違ってきています。そんなふうにつながりが変わっ

てきている中で再構築するというのは、そう半端なことではないし、勝手にできることでもありません。みんなそこでいろいろつながりを作りながら小さな輪が少しずつ出てきているのですが、問題の状態が半端ではないです。

具体的な話は控えますが、特に岩手の支援の場合には、今日みんなで知恵を出し合ってどうやっていけばいいのだろうかということも少し話し合えるといいなと思いつつここに参加しています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

ありがとうございます。では、小野田さんが帰ってこられたので。

小野田

静岡ではこの検討会の皆さんから背中を押していただいて、7年前から東海地震を想定した広域の図上訓練を行っています。今回の東日本大震災の直後にも東京でいろいろと皆さんとお話をする中で、日本財団さんとも連携していく中で、岩手に派遣を任せていただきました。静岡から岩手というと、バスで11時間ほどかかりますので、距離としても厳しいところがあったのですが、7年間の訓練を通して平時に関係を持っていたということで、比較的早い段階の4月8日に70人ほどが宿泊できる現場を持たせていただきましたし、かなりスピーディにスタッフの人材を確保できて現地本部を立ち上げることができたなと思っています。

資料3の5ページにも書きましたが、拠点を持って活動してきたのですが、どうしても被災地の方々の顔の見える関係を作るのに非常に時間がかかりました。ですから、この後まだ1年間は引き続いて岩手の現場を持っていきたいのですが、今後についてはこれまでの形から一步踏み込んで、具体的な仮設を5カ所程度担当しながら取組をしていきたいと思っています。ただ、数よりも中身の問題になってくるので、その辺のところをどういう形で人材を確保してやっていくのか、被災地での関係性をしっかりと見極めながらやっていきたいと考えています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

それぞれ課題を皆さんの方から出していただいたのですが、一つは、被災地の方から要請が来ない場合に、受援力が発揮できない場合にどうするかということをお私と水島さんから出しました。そして、ボランティアの送る側の論理になっているのではないかという部分を山本さんと小野寺さんからいただきました。これは、今後の災害が起きた場合にどうするかという部分の課題にもなると思います。

一方で、岩手県の今後の支援をどうしていくかということに関しては、山崎先生から、生活によりそう支援、地元を主人公にしてどうやっていくかということと、小野寺さんが言われた漁業などの専門的な支援をどうしていくかというお話がありました。そのあたりを分けて考えていった方がいいかなと思うのですが、どうですか。山本さん、いまだに送る側の論理で生ものが送られてくるというのはあるんですね。

山本

あります。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

結局、各都道府県では物資はかなり限定していたけれども、個人が勝手に送ってくるものですね。

小野寺

そうですね。個人が送ってきます。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

僕がゴールデンウィークに行ったときは、こいのぼりが山のように届けられて、「このこいのぼりをどうする」「海へ放流するか」とかと言っていたのですが。

山本

皆さんから上がった課題の中で、例えば現地に行くための交通費の問題がありました。特に岩手は遠方なので交通費がかかるというところでは、こういう支援は延長してほしいということでコンセンサスが得られるなら、「これはコンセンサスを得た」ということで報告してしまえばいいと思います。もう少し延ばそうよと。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

それはどう思われますか。

山本

正直、三重から行くのも非常にお金がかかるのでありがたいですけども。

小野田

静岡で、すべての市町の社会福祉協議会に12月末現在で調査をかけたのです。ボランティアバスを出すにしても、ボランティアに行っていていただくにしても、交通費の問題がネックなので、「被災地にボランティアを派遣した場合に行政から補助金や助成金という支援が受けられたか」という調査をしたところ、行政からの支援があったというのは伊東市と長泉町だけでした。僕は今、県議会に対していろいろな注文をつけ始めているのですが、関心を持って現場から学ぶことが平時の取組にもつながっていくから、特に東海地震などが心配されている静岡県においては、県民の人たちが被災地に行けるような条件づくりをもっと積極的にやってもよかったのではないかと。今、かなり強力でそういう働きかけをしているのですが、その辺は皆さんのところではどうでしたか。静岡から新幹線を使って行くと4万円ぐらいかかるのです。それに有給休暇を取って行く。初期の段階では釘を踏んでは危ないとか、寒いから防寒着も要るとなると、そういう装備だけで2万円ぐらいかかるのです。行きたくても行けないということがあってそういう調査を試みたのですが、そ

の辺はどんな具合ですかね。

山本

三重では、うちの出したバスについては半額ぐらいのバス代は県から助成をいただいています。本人負担は半額分なので、1回乗って1万5000円～1万円ぐらいで済んでいます。ほかの市町が出している場合にそういう助成があったかどうかというところとちょっと微妙かなと思います。社協が出しているのはありましたが、松阪市社協さんとか、本人負担無しで行っているのもありました。

植山

社協だとお金を多分市からもらって無料にしているところがありましたが、われわれの場合はバス協会が1台について10万円ぐらい援助してくれたので割と安く行けたのです。それが来年度は見込めないのどうしようかと思っているところです。今まではそういうのがあったのですがこれからはなかなか難しいということで、せめて高速代だけでも無料になれば何とかできるのかなと思っているのですが。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

高速は個人で行く場合でもやはり無料ですね。

山本

個人で行く場合も申請すれば無料です。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

個人についてはまた別の考え方があって、インターの降り口が大渋滞を起こすのを見ると、個人で乗用車で行くのまで無料にするべきなのかなというのは正直思います。岩手の沿岸はすぐ渋滞するではないですか。仙人峠を降りたところでもう車が動かない。ボラバスは一定分わかるのですが、個人の車まで無料化すべきなのかなというのは個人的には思います。高速の問題とバスなどでの移動の問題があったのですが、いかがでしょう。

復興は地元の方が主人公になっていくので、これからの支援というのは、山崎先生が言われたような「よりそう支援」であり力仕事のボランティアではなくなっていますね。それで言うと、まだまだ支援ニーズは県外からでもあると思います。

山本

よりそい支援になればなるほど、同じ人がなるべく継続的に行く必要が出てくるのです。そうすると、単発で行く人は自腹で構わないと思いますが、長期、本当に必要とされるニーズをしようとすればするほど、その個人にもものすごく負担が偏っていきます。そこがすごい課題だなと思っています。

今、「個人は」という話もあったのですが、繰り返し繰り返し毎月必ず行ってくれているような人に対しての支援はどうするのだろうか。そういった部分については個人でも分けて考える方がいいのかなと思います。毎月、それこそ三重県から行っている方もいるので、よりそうために必要な長期化をどう支えていくのかという部分だと思います。

藤田

確か赤い羽根の共募の助成金で5次か4次ぐらいから、交通費はバスとかの業務で行く人の分は出すけれども、ボランティアで行く人は助成の対象外になったのです。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター長）

申し訳ありません。そこは随分議論したのですが、それを個人のお金に替える人たちが結構出てしまったのです。つまり、個人なのかボランティアなのかというのが分からなくなっている人があって、交通費の出し方を随分議論した結果、今おっしゃるような形に変更しています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

ボランティアと言いながら、実はボランティアではなくて単なる観光とか別の形でということですね。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター長）

観光バスで、温泉が付いて、ちょこっとボランティアというのもあったり、形が多様になったので線引きが難しくなったのです。ただ、今度の第7次の共同募金の支援は1000万円まで延びましたし、活動期間などもかなりいろいろ修正していますので、ぜひ申請されたいと思います。18億円ぐらいは支援が終わっているのではないかと思うのですが、まだ十何億かのお金があると思います。まだ募金を続けていますから、短期は50万で、それから300万円のものを延ばしていますので、もっと使われたらいいかと思います。ぜひ、ホームページを開けてください。そうすると、今おっしゃったような細かいことも載っています。毎回毎回、皆さんと議論して現場の方の声を聞いて修正していますので、今度のものは金額が大きくなっていると思います。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

要するに、移動の問題が必ず出てくるということですね。そこで必ず制度を悪用するような人とのせめぎ合いが出てきます。ただ、長期支援の方からすれば、そこは非常に経費がかかることなので何とかしたいということですね。それを高速の無料化でいくのか、バスの一定助成的な部分でいくのか、これは結論が出切らないので。

物の問題も出てきました。送る側の論理になっているというのは、今後の災害に向けての一つの課題になっていくかと思うのですが。

小野寺

やはり情報発信がすごく大事だと思っていたので、Twitterとかホームページ上でも、現状こういう物資が届いて困っていますとか、今足りないのはこれとこれとこれですとか、避難所から聞いた情報を上げるのですが、やはり情報のタイムラグがあるのです。ホームページを見て、すぐに送るにしても、距離がありませんよね。東京から送ってくるにしても、岩手まで1日ないし2日かかる。もしくは、テレビの夕方のニュースでこれが必要ですと言ったとして、送られてくるまでにすごくタイムラグがあります。一般の人たちから物が届くまでの間に、NGOさんが大量に持ってきて二重に余ったりということが出るので、情報のタイムラグはすごく難しい問題だなと思っています。生ものとかは本当に個人の問題だと思うのですが。

山本

現地の方の立場に立っているかどうかという、すごく根本的なところがあります。本人たちは現地の方の立場に立っているつもりなのですが、明らかに送る側の論理だろうというところはやはり修正したいかなと思います。個人の問題は仕方がないにしても、組織でも、それこそ「うちは三重県〇〇市だから、〇〇名物××を送ろう」とみたいな話になるわけです。「いやいや、相手が望んでいるものかどうかというチェックはしないの?」というところですごく苦笑いするようなやり取りが行われて、「まあまあ、きっと喜んでくれるよ」と思い込みでつながってしまうこともあるのですが、「うん?」と頭をかしげることが多いですよ。

植山

今回もタイムラグの問題で、集まってから出してくれると、もうそれは終わっているというのが結構ありましたね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

物資は先読みを常にしていないと、必要なときに集め始めていたのでは遅いという話は、阪神・淡路大震災以降、コーディネーターの間では常識的な教訓になっています。

小野寺

普通の人にはまだまだ届いていないです。発災直後は靴が足りない、靴下が足りない、下着も交換していませんという状態だったので、最初に欲しいのは着替えです、靴ですという情報の発信をしたのですが、それはそれでやはり来るのは大変なのです。汚れている靴下もあり、下着の古着は基本的にNGなはずなのですが、そういうものが入っているのが来ています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

個人の問題は置いておくとして山本さんは言われましたが、それで言うと、各県とも物を集めますという後方支援のところでは、例えば「下着は新品に限ります」などの注意点は大体入れられているのです。

小野寺

そういう情報は出ていました。

植山

新品か洗濯したものというのは書いているのですよね。

山本

結局、配れない衣類関係は各県が集めたものでも随分廃棄はされているはずですが。三重県でも、集まったものの一部は廃棄はしています。そこが個々の方には追いついていかないというか。

藤田

千葉県でも、新品限定、おむつでも基本的に未開封のものということで県庁で集めて、品物の限定はしていたのですが、駆け込みで炊き出しというのが結構困りました。スマトラのときのお礼にといって、年寄りしかいないところに本場のカレーを200食と言われても、その後、「残ってしまいました」とボランティアセンターに全部持ってこられて、後で食べるのが大変だったということがあります。取りあえず一番やりやすい支援が炊き出しというのは分かるのですが、どうしてもテレビカメラが集まっている避難所に集中して、誰も調整できない状態で、余ったら全部ボランティアセンターに持ってこられるというのが、旭市では一番困ったことでした。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

マスコミに「どうですか」と言われたら、被災者も「おいしいです」としか言いようがないですよ。

小野寺

カレーの炊き出しは釜石にも来ていましたよね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

大槌にも来ていました。

藤田

気持ちは分かるのですが、つなげる人が失敗すると大変なことになります。最後はボランティアセンターに持っていけばいいという考えがどこかから広がったらしくて。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

今、防災の話が出ているのですが、水島さんの方から何か。

水島

被災地にボランティアがいっぱい入っていて、一種のテリトリーみたいなものが出ていたという話がありましたが、今回、岩手なら岩手で連携したような事例はあまりないのですか。実は、私は2週間、お盆までの仮設住宅への引っ越しを大槌から釜石まで受け持ちました。まごころネット遠野にあいさつに行ったら「助けてくれ。実は、仮設住宅への引っ越しが始まるのだけれども、支給されたげた箱が山積みになっていて、配達できていないんです。納められない」と。「車で運んだらいいじゃないか」と言ったのですが、「天気の加減とかで、家具類だから決まりがあって運べない。もう3日しかない。トラックを貸してくれ」ということで、すぐトラックを用意して3日間貸し出すという連携をしました。それから、被災地で今何が一番困っているのだろうかと、私は阪神・淡路大震災の経験から絶対に食器類だと思ったのです。それで、たまたままごころネットに行ったら、ちょうど西日本グループが食器類を持ってきていたので、それを仮設住宅に持って行って、広げて好きなものを取ってもらうということで、順番に回っていったのです。これが一番喜ばれました。そういう情報さえあれば、現地でいろいろな団体との情報交換ができて有効に動きました。僕はそういう経験したのですがほかはどうでしょう。

山本

それは情報というよりも、例えば物資なら物資で、この物資がどういうタイミングでどうやれば喜ばれるか。物でも、食べ物でも、活動でもそうなのですが、それをコーディネートする人がうまくつなげられるかどうかによると思うのですね。例えば水害だと高圧洗浄機がものすごく役に立つのですが、使い方を知らない人のところにぼんと送り込んで放置されるだけです。それと同じで、例えば食器が届いたときに、偶然水島さんがいらっしゃったから「これは喜んでもらえるで」という話になったけれども、知らない人がどんと食器を送られたら困ってしまうのです。そのマッチングをどうするか。先ほどのカレーも、それをどうマッチングするかということだと思うのですよね。そっちの方が難しいのかな。現場での協働した事例というのは当然いろいろなところであるのですが。

水島

たまたま遠野市はまごころネットが中心になっていたのですが、被災地の面積が大きかったではないですか。それで、僕らも生協のボランティア団体として別のところで基地を設けていたのです。けれども、情報がないから毎日出向いて行くくせをつけていたのです。そうしたら、やはり情報が入ってくるのです。あまりに被災地の面積が大きすぎたので、それぐらいの関係がこれから熟成していくといいなと思っています。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

地元のコordinエートの問題と後方から送る側の支援の問題がある。後方の方は、それぞれ皆さんいろいろ場数を踏んでこられているからそれなりにコordinエートは出てきているけれども、今回で言うと現場の

問題が大きいのでしょうか。

藤田

千葉でも、県庁が養成した災害対策コーディネーターとか民間資格を持った人が「私はコーディネーターですから」と言って来て、いまだにいるのです。それで、勝手にカレーをいきなり避難所に持っていき、ああいう変な資格みたいなのはどうにかならないのですか。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

新しいのが出されましたね。

小野寺

岩手の場合、沿岸部はNPOがすごく弱いのです。福祉系でも何でもいいのですが、地元でNPOの団体があるかないかで違ってくるのですよね。なおさら中間支援のNPOがあるかないかで、そのコーディネート力は全然違ってくるのです。ほかから来た人たちをどうつなげてあげようかというマッチング力があるので、NPOの中間支援がない地域であるがゆえにすごく現地が慌ただしくなっているところがあります。大船渡は事務所がない中間支援で、釜石は唯一事務所を持っている中間支援だったので、釜石に集中したのです。どの団体さんが行くにも、遠野だとまずまごころさんに行き、釜石に行くとアットマークに行きというところで、釜石には全部情報が集中しましたね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

物資の問題から、各地域での受援力的なものに話移ったのですが、例えば僕が支援に入った大槌は釜石のすぐ隣です。縄張りではないのですが、やはりブロックがあって、大槌は釜石とはつながりがあるけれども、山田とか宮古の方になるとブロックが違うからつながりがないみたいな部分がありました。それで言うと、釜石は同じブロックだったらもう少し支援してくれたいのにとか、今ごろちょっと思ってしまったのですが、そのあたりは難しいのですか。

小野寺

難しいですね。でも、アットマーク釜石という中間支援NPOが大槌の方までカバーしようということで、大槌の社協や役場の方に結構つなぎに行きました。行政同士はできないところがあるので、間に入るような形でNPOが少しネットワークを軽く動いたところがありましたね。

一番びっくりしたのは、発災10日後ぐらいのときに大船渡に行ったときに、もうほかの団体さんがボラセンのようなものを立ち上げていたので、「地元の団体なので一緒にやりましょう」と言いに行ったら、「地元のNPOがこんなに遅く来て」と言われてすごい排除されました。地元のNPOはそれまで動けなかったというのはあったのですが、「大船渡の方も一緒にコーディネートしていきましょう。一関から情報をつなぐので」と言ったら、外部の方が入っていて、「来るのが遅いよ。来週にはトレーラーハウスが来て、ここに事務所ができるから」と言われて、そこはつらかったですね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

これは山本さんも言いたいことがいっぱいあるのではないですか。

山本

いやいや、私はよそ者として控え目に。1年ぐらいたってやっと「ああ、来てたんだ」と言われるぐらい控え目にやっていたので。

本題の質問ですが、現状を言葉を悪く言いますと、被災地での支援活動が、NPOなり、NGOなり、ボランティア団体なりの、一旗揚げる場になってしまっているのです。ここで一旗揚げておれたちの活動を広めるぞ、認知してもらおうぞと。行って被災された方と接する中で喜ばれたからこそここをやりたいのだというポジティブな意味でテリトリー意識を持つというのもあるのですが、それ以上に、「いや、ここはおれたちがやっているのだから」という支援する側の論理になっているのかなというのは感じるがありますね。

植山

山田町に、今回、国際交流関係のNGOの人たちが結構入ったでしょう。その人たちから、「山田町に行くのでコーディネーター二人を派遣してほしい」と言われて行ったは行ったのですが、最初は物資の仕分けだったので。二人とも大人しい人だからそれを粛々とやってくれたのですが、いわゆる国際交流関係の人が今回われわれにも声を掛けてくれて、結構そういう動きはよかったのかなというのはいいい面で感じましたね。山田町は、三重も行かれていたからいろいろあったのだけれども。

山本

うちにもいろいろありましたよ。

植山

そういう国際交流関係のNGOだと、今もいろいろ協力関係を持っているから、割と今回そういうつながりができたのかなと思っています。

小野寺

発災直後の対応は早かったですね。地元の人たちが動けなかった分、岩手県外からの支援が早く入ったのですごく助かったというのが地元の人たちの声です。行政も回らなかったですから、外部支援が入って助かったという話は大きいですね。

水島

私は5日目に、緊急物資を盛岡から海沿いに運ぼうということで行ったのですが、燃料はない、トラックも乗用車も流されてない。通信が駄目だったので衛星電話でやっとやり取りをしたのですが、5日目に避難所に物資が届いていなかったのです。豆腐1丁を12人で食べたのが1日の食事だと目の前で言われてがくぜんとして震えがきました。海沿いの被害の特徴として、これから東海東・南海と危険視されている中で、根こそぎ持っていってしまうから何も残っていないのです。そこに交通も物資も通信も遮断されるという状況が日本で再び起こらないとは限らない。そのときに、飲まず食わずで何日も生きられるわけがないから、その辺が大きな課題になってほしいと思っているのです。僕らが5日目に現地に行って、何も食べていないことが分かって動き始めたということですから、私どもが行けなかったらあの人たちはまだ何も食べられなかったのではないかという気がしますね。海沿いのところの大きな津波災害というのは、できるだけ物資の支援を早急にするべきですが、まだまだ認知が弱いのです。いちいち許可を取らないと高速道路の許可証をくれない中で、やっと取って走るわけですから、その時間的ロスもかなり大きな壁があるということです。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

恐らく今後の広域災害でもすべての地域が甚大な被害を受けるわけではないので、ある地域が壊滅をした場合に近隣の市町村が支援に入る仕組みというのは必要だと思うのですが、東南海、南海、東海などが想定される場所では、それぞれの市町村間とかでそういう動きというのは出てきているのですか。つまり、比較的被害の軽微な地域がよそから支援に入ってくるような、室崎先生が言われた受援力の代わりをするようなネットワーク、連携はもうできてきているのかということです。

小野田

毎年広域の訓練をやってきて、そこに参加をしてくれている県外の人たちで、例えば静岡県の西部地方であれば愛知県とか大阪、神戸、三重の人たちが入るといえるものは大体できつつあります。今、離れた自治体と自治体で支援協定を結んでいます。われわれの組織も、平時に関係があったからレスキューさんが七ヶ浜に入るきっかけがずっとできたのと同じように、やはりこういう検討会で広域の団体と顔が見える関係ができてきていますので、そういうことも今後検討していいのではないかと、していくところに来ているのかという感じがします。NPO、NGO同士が緊急時にどう絡み、かかわりを持てるか、協定というか。

静岡県の場合は、東部、中部、西部、賀茂地区と四つにゾーンを分けていて、その四つのエリアでかばい合いながらボランティアセンターが立ち上がれない市町を支援していきながら、でも地元ではとても対応できないところについては、これまで7年やってきた訓練の中で県外のNPO・NGOのどの人たちがどの地区に入るということまではできてきています。東海、東南海、南海と3連動で来てしまったら本当に無理ですけども。ただ、そういう面ではNPO同士が平時にどういう関係性が作れているかということも、今後はわれわれとしても考えていくところに来ているのではないかと思います。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

最初に成功事例を聞いたら、あとが言いにくいですね。

山本

三重は全然そこまではできていないのですが、今年、ちょっと変わったことを三重県としてやってくれました。災害ボランティア活動支援の基金をつくろうということになって、県内の支援センター立ち上げのときのお金に加えて、大規模災害が起きたときにはその団体が三重県に支援に来てくれるときの初動のお金も含めて活動費を支払いますという協定を結べる基金条例が今年やっと通りました。そこで、まずは2団体だけなのですが、三重県と信頼関係を持ったどこかの支援団体で、初動の300万円を含めた協定を結んでいくということです。それは、NGOでもNPOでも、分野も限らずに、子ども支援系でも、福祉系でも、外国人系でもいいので、将来的にはいろいろな分野でそういう協定を結んだ団体を増やしたいという話はしているのですが、予算がないのでまずは2団体というところでは。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

神奈川はどうでしょう。

植山

せっかく今、県と一緒にやっているのです。来年の3月までは協定を結び直してまたやるのですが、今のファンドのことも含めて話し合いをしていこうという機運にはなっています。僕らもそういうファンドに関しては、県と一緒にやっていけたらなと思っています。その情報をまた下さい。

山本

はい。紆余曲折あってやっと通りましたので。

植山

僕らもそう思いますね。そういうファンドに関してはやはり大きいですものね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

高知は、「これからそういうのもやらないとあかんね」ということを話しているくらいのところでは。

○今後の取組の展望（注目すべき視点、注目できる事例なども含む）

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

もうあまり時間がないのですが、生業支援やよりそい支援の話が出たので、今後どういう展望でやっていくかという部分についてご意見をいただけたらと思います。いかがでしょうか。ものによっては専門的な知識が要るものもありますし。

小野寺

現状の課題を述べてもいいですか。被災地求人結構出ているのですが、応募者がいないのです。求人と応募者のミスマッチが起きていまして、うちでも一人募集をかけたのですが応募がありません。生業支援と言いながら、仕事ができる人たちが今被災地に何人いるのだろうという部分をまず調査しなければいけないのではないかと思います。所属していた会社が復活したので戻りますという人たちは戻っているでしょうし、内陸に避難して、そこで定住して仕事を探しますという人もいます。そうすると、現地に残っているのは働き盛りの世代ではない人たちが多いのではないかということも推測されます。

漁業に関しては、陸前高田においては3分の2の漁師さんたちがリタイアメントしているという現状です。女性の手仕事はたくさんあるからいいのですが、漁師の方たちは海でしか働けないので、ほかで何か仕事を探そうと思ってもそういう気になれない。その部分で引きこもりがちになっていて、男の手仕事が欲しいとか、男のストレスの発散の場を作っていかなければいけないという課題が、つい最近、垣間見られる状況になってきています。40代、50代の働き盛りの方が仮設の中で心筋梗塞を起こしているという話も聞こえますし、簡単に生業支援ではなくて、働ける世代がどれぐらいいるのかというところからやっていかないと、多分仕事を作ってもその仕事は続かないだろうと思います。

山本

緊急雇用で取りあえずの職を得ているという問題が出てきているのかなと思いますね。

小野寺

それもありますね。

山本

取りあえず来年度末ぐらいまでは、行政の緊急雇用で、1日どこかでぼーっと立って交通整理していたら結構な給料が入るという話もあります。それを駄目だとは言わないけれども、その人たちが次の仕事にちゃんと就けるのか。仕事に対する思いとか生きがいをスポイルしかねないような危険な緊急雇用もあるかなというのは感じますね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

仕事の話が出ていますが、もちろん仕事だけでなく、被災者の方にどうよりそっていくかという要援護者の視点などもあるので、岡野谷さん、どうですか。

岡野谷

私がここに書いたことは、先ほど受援力、地域力と言っていた言葉の範囲を少し広げませんかということなのです。例えば沿岸部は、地震だけでなく津波もあって何もかも持って行ってしまったという話がありましたね。その中で、私たちは要援護者という人たちの支援をしていたのですが、地域の中の人たちの言葉は、

「何とかここにとどまろう」「頑張ろう」ということです。ただ、支援しなければいけないような子どもたちや、おじいちゃん、おばあちゃんを本当にここにとどめていいのかということ、やはり言わなければなりません。1週間でも2週間でもいいから、いったんそこから離れて暖かいところに行こうよというのを母親はすごくありがたがったのですが、家族会議をすると、「何言ってるんだ、嫁が」「家族は今が大事なんだ。ここにとどまらないで外に出たら、もう二度と帰ってこられないぞ」と、それが地域の言葉だったわけ。受援力というのは、外にいったん出して、そこで助けてもらうというのも一つの受援力なのではないかということ、少し考えていかないといけない。もちろん地域の中も大切だし、行政は何かしてとどめようとするし、福島県の話になったら福島でそこに残ってしまった人たちもつらい思いをしているわけだし、その辺の「地域の力」というのはもう少し広げていってもいいかなと思います。

それから、支援者が行政側に立ってしまったというのもあると思います。要するに避難所で助けてあげようと。「外へ出る」と言っているのに、「いやいや。ここだって一生懸命、大丈夫だよ」と言ってしまったのは支援者なのです。特に外から入っていたスクールカウンセラーとか保健師さんたちは「お母さんがそんなに言ったら駄目よ。ここで安全だと国が言っているのだから安全なのよ」。何も根拠はないですね。そういうことを支援者側も少し考えていかなければいけないと思いましたね。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

なるほど、ありがとうございました。あとはどうでしょう。

藤田

今回のような大きな災害だと復興に長くかかると思うのです。今後、例えば生業支援とか新しい課題が出てくるのですが、どこまでが防災ボランティアのくくりでしょうか。要するに、復興だと、例えばここに集まっているメンバーではなくて別のセクションがあるのではとか、どこまでやっていくのかというのが疑問です。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

どこまでやっていくのかということはどうですか。

山本

そこが多分ボランティアのいいところで、それぞれに範囲を決めていいのだろうと私は思っています。それこそ生業支援になってくると、今、意識の高い自営業者が東北に支店を出すということをしていて、ボランティアよりもその方がよほど役に立つわけです。ボランティアではなくて、ちゃんと収支を含めた上での支援をしてくれているだろうから。「そこまで範囲じゃない」と思う人もあるだろうし、その人によりそっていくと、その人がちゃんと働けるところまであって初めて復興だなと思うと、何ができるか分からないけれども一緒に考えたいと思うというのもボランティアの本質だろうし、難しいですね。「考えたってできないじゃないか」と言われたらそのとおりですが。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

僕は、ボランティアは薬かなと思っているのです。人間にはもともと自然治癒力というのがあって、体力がぐっと落ちて風邪を引いたときなどに、治癒力を助けるために薬があるのです。だから、薬に頼りすぎても駄目だし、かといって薬がないと駄目だし、そこは線を引ける問題ではないので難しいと思うのですが。ただ、ボランティアをしたい、助けたいという人とニーズをきちっとつなげていくということが、ここに集まっているメンバーの役割にはなってくると思います。その支援もどこまでかかわっていくのかと言われると、ゴールが見えないですものね。

時間の方が押してしまって、結局どれも結論が出ないままで。もともと結論が出ると思ってはいないので、どうしてもこれだけは発言しておきたいということがあればお受けして、あと、小村先生、山崎先生からコメントをいただいてこの分科会のまとめに代えたいと思います。いかがでしょうか

小和田

1点だけ、傍聴からでもよろしいでしょうか。先ほど、せっかくこういう場があるのだから広域支援のネットワークを作ったらどうかという話がありましたが、まさにIT面でそういうことを支援したいというボランティアが結構私の周りにいます。ただ、仕組みは作れるのですが、誰にコンタクトしたらいいのかが分からない。かえってそこが技術者の悩みです。そういうところを結び付けることで、皆さんが平常時でも、インターネット越しになるかもしれませんが、お話しできるようなお手伝いができたらと思います。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

また、ぜひよろしく願います。それでは、小村先生から願います。

小村

1時間半ぐらいお話を聞かせていただいて、いろいろな意味でボランティアの質が変わりつつあるということが確認できました。ただ、これは必ずしもいい意味だけではなくて、特に物の送り方については5年前に戻ってしまったというイメージをあらためて持ったところです。今回の災害で、あまりに多くの人が絡むようになったために、数年前に私たちが乗り越えてきたはずの課題をもう一度繰り返している。そこが出てしまったように思います。なぜ、被災地で物を買うということをしなのかな。被災地で買うことによって被災地の経済を回していこう、それが復旧・復興につながるというのはわれわれのような者の共通理解であったと思っていたのですが、それがまた物の送り方の議論に戻っている。裾野が広がって、そういった人たちも入ってくることによって起きているボランティアの質的变化の問題をしっかりと考えなければならぬとあらためて思いました。それが1点目です。

山崎さんの「受け手がなかったら」という話は、多分、答えは出つつあると思います。やはり近隣の支援ということになるとと思いますが、そこでぜひ皆さんに4月になったらチェックしていただきたいのが、「亡所マップ」です。四国地方整備局の災害も地形も地域経営も分かる人が、歴史的にこの地域は災害を食らってかつて消えた所があるというのを地図上で確認しようとしています。何が言いたいかというと、東南・海南

海はまだしばらく起きないです。でも、そういう所に住んでいるということ、もう一度考えよう、住まい方を改めることによって受け手が亡くなるという事態を避けようということです。災害に強いまちづくりは立地から始まるはずだから、そのことは私たちはしっかり考えないといけないと思います。

3番目は、よりそい支援、専門的支援という話がありました。先ほどの交通費の議論にちょっと絡む話なのですが、税金をかけても送りたいボランティアとはどういう人たちなのか。そのことをしっかり考える必要があると思います。単純労働者の全国大規模動員ではない段階に移っています。だから、その任に堪えられるレベルの人たちとはどういう人たちなのか。それはボランティアとはまた違うレベルの集団なのかもしれないけれども、その部分をもう言ってもいいのではないですか。その問題を語ることによって、おのずとその人にふさわしい処遇とは何かという議論が出てくるような気がします。これもボランティアの質に絡む話ではあるのですが、よりそい支援、専門的な支援というのはその辺に答えがあるような気がしました。

私もまだ途上ではあるのですがそのようなことをちょっと考えました。1点目は、裾野が広がったことによるボランティアの質的变化ということ、マイナス面も含めてしっかり考えようという話。2点目は、立地ということも意識した災害に強いまちづくりを考える必要がボランティアのレベルでもあろうという話。3番目は、よりそい支援、専門的な支援というからには、それを担えるボランティアとはどういう人たちなのかということについてわれわれ自身が明確なイメージを持つ必要があるのではないかという話です。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

ありがとうございます。それでは、山崎先生。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター長）

活動拠点の災害ボランティアセンターの役割、機能の問題がちょっと出たと思うのです。非常に矮小化しているのではないかと、本当のニーズが拾えてなくてマッチングだけで終わっているのではないかというお話があったと思うのですが、災害ボランティアセンターの役割や機能についてはもう少し検討の必要があると思います。

2点目は、地域の団体間の連携が非常に弱かったという話があったと思います。この問題は、ITを通してかなり全国的なレベルでつながり合いがもう出てきています。ただ、お互いの強みを生かし合うとか、コンフリクトを乗り越えていくクリエイティブな関係性をどう作るかということにももう少し心を致していくことが必要ではないか。

それから、ボランティアの質の問題をおっしゃったのですが、今回は泥かきから始まって、ボランティアセンターの立ち上げ、引っ越し支援、それから仮設に移っていくとか、時期によってボランティアの役割が違うということ、時期によって活動の内容が違うのではないかということ、もう少しきちんとお互いに認識していかなければいけないのではないかと。

よりそうということは、ニーズをきちんととらえて、仮設にいる人にだけサービスが行っていいということではなくて、在宅の方にもみなしの方にも行かなくてはならない。ただ、そこに個人情報などの壁があるので、

この問題をどう克服するのかという課題はもちろんあるのですが、その辺はどうしたらいいだろうかということがあるだろうと思います。

ミスマッチはどこでも起こりやすいことなので、これは一個ずつもぐらたたきのようにやっていくしかないと思います。というのは、JCNの活動の中で、18の省庁がおいでになって、こちら側からボランティア団体が入って、現地で9回、そのほかの場所で三十何回話し合いをしてきたと思うのです。かなり具体的な問題でつぶしていくという経験を私たちは数十回やってきていますから、そういうことを通してお互いの状況を確認し合ったり、相互理解を図るパイプは少しずつ出てきたのではないかと思いますので、それは積み上げをしていかなければできない問題ではないかと思いました。

それから、仕事のことについては、ボランティアができることはそうたくさんないとは思いますが、船をかなり大量に、しかも現地の方が本当に必要だという船をボランティアさんが送っています。けれども、護岸の問題、水産加工の問題、流通の問題等のもっと大きな問題があるので、それらがどうつながっていくかということの検討がなければ小さなものに終わってしまう可能性があるのです、その辺の仕組みはもっと必要です。例えば、14.5mの堤防を造るという話を復興会議ではやっています。それも大事かもしれませんが、本当に町の方が必要な地域の暮らしとはどういうものか、私たちボランティアの側がその声をしっかりと届けていくという作業も一方では積み上がっていかないと、住民不在の形でそれが進んでしまう可能性もあるので、住民によりそうというのはそういうことになるのではないかということを考えました。

特に岩手の場合には、耳にたこができるほど「本当に生きていてよかったんだろうか」と言われてしまうのですが、今、そういう時期に入ってきているので非常に私たちも苦しい時期です。けれども、この矛盾と苦しみの中から逃げないでよりそい続けるということはどういうことなのか、皆の知恵を出し合いたいと思います。

山崎（NPO法人高知市民会議理事）

ありがとうございました。最初に移動のバスの問題、物資の問題、受援力の問題と、生業とかの支援の問題と、四つお話をしました。十分まとまり切らなかったのですが、すぐに結論が出る問題でもないので、またそれぞれの地域に持ち帰って、今日の意見を参考にさせていただければと思います。皆さん、進行にご協力していただきましてありがとうございました。